北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

小式部内侍「大江山」歌説話における教訓：「即詠」と「証」としての歌徳説話

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2012-01-27
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 菅原, 利晃
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007177

小式部内侍「大江山」歌説話における教訓

―「即詠」と「証」としての歌徳説話―

菅原利晃

はじめに

大江山いくのの道の遠ければまだふみも見ず天の橋立

この、『百人一首』にもとられている小式部内侍の歌、そしてその説話は、時代を通じて広く知られているものである。歌集、歌学書、説話集、謡曲、随筆など数えきれぬほどの作品に採り入れられている。本稿では、この「大江山」の歌説話の教訓に着目し、諸書で示されている教訓について、小式部内侍の他説話も含めて比較・考察してみたいと考える（注1）。

一、『十訓抄』における「大江山」歌説話の教訓

『十訓抄』の「話末評語」をみると、直接「教訓」が見出せる「教訓説話」は少なく（注2）、「徳目」と「小序」とによって自ら「教訓」を示している（注3）。そのような性格を考慮に入れ、『十訓抄』第三・一「大江山」歌説話を見ると、話末に「これはうちまかせて理運のことなれども、彼卿のこゝろには、これほどの歌たゞ今よみいだすべしとは、しられざりけるにや。」とある。この「話末評語」は、定頼卿への批評にとどまり、これだけから、明確な一つの教えが示されているとは想定しにくい。ところが、『十訓抄』には、実は簡潔でわかりやすい教示が存在する。それが、先に述べた「徳目」である。当該説話を含む第三の「徳目」は、「不レ可レ侮二人倫一事」である。これにより、「大江山」歌説話は教訓が引き出される。従って、この「徳目」と定頼卿への話末批評とを併せて、読者は「人を軽侮するなかれ」という教えを読み取ることができるのである。加えて、第三の「小序」では「人をあなづることは、色は替れども必ある事なり。」「孤児・寡婦なりともあざむくべからず。」などと教えを説いている。つまり、「徳目」「小序」「話末評語」、この三つから『十訓抄』の「大江山」歌説話は、前述のような「教訓」を示しているのである（注4）。

なお、「大江山」の歌の後の定頼の反応については、「いかにかかるやうはあるとて、ついゐて、この歌の返しせむとて、し

ばしは思ひけれど、え思ひ得ざりければ、ひきはり逃げにけり。」（『俊頼』）、「定頼ひきやり逃げしと云々。」（『袋草』）に対して、『十訓抄』では「おもはずにあさましくて、『こはいかに、かゝるやうやは有。』と計いひて返歌にもをよばず、袖をひきはなちてにげられけり。」とあり、いかに意外であったかを「あさまし」という語を用いて表わしている。これは、「これほどの歌たゞ今よみいだすべしとは、しられざりけるにや。」とともに、未熟で歌の才能などないと軽視していた先入観と、みごとな秀歌・即詠の才との差異を際立たせる。それが「軽侮するなかれ」という教訓へとつながるのである。

また、「即詠」「機転」という点から女流歌人をみれば、伊勢大輔、周防内侍、小侍従などがあげられよう。しかし、『俊頼髄脳』で「大江山」歌説話と並置されていた、伊勢大輔「口なしに」の和歌説話は、『十訓抄』では、ごくわずかに簡略化したものを「第一可レ定二心操振舞一事」に載せるにとどめている（注5）。小侍従については「まちよひの小侍従」とだけ「第一可レ定二心操振舞一事」に記載するだけである（注6）。周防内侍「春の夜の」の和歌説話は、『十訓抄』では採っていない。これらに対して、「大江山」歌説話は前述のように「人を侮るなかれ」という教訓の例話となっている（注7）。ということは、『十訓抄』は、即詠それ自体にはさほど着目していないのであり、その中でこの徳目に採録している小式部内侍には、先の三人とは異なる面が存するのである。幼少・未熟なる歌人、そして著名な母和泉式部をもつがゆえの周囲の軽侮、それを乗り越えた上での華々しい歌壇デビュー、というような側面である。単に機転のきいた、優美なる和歌の応酬ということではすまされないものが『十訓抄』では想定されるのである。

二、その他の書における「大江山」歌説話の教訓

ところで、この「大江山」歌説話は数多くの書に採られているが、ここで、その主なものをあげてみる。

まず、『俊頼髄脳』であるが、説話前に「歌の、八の病の中に、後悔の病といふやまひあり。歌、すみやかに読み出だして、人にも語り、書きても出だして、後に、よきことば、節を思ひよりて、かくいはでなど思ひて、悔いねたがるをいふなり。されば、なほ、歌を詠まむには、急ぐまじきがよきなり。いまだ、昔より、とく詠めるにかしこき事なし。されば、貫之などは、歌ひとつを、十日二十日などにこそ詠みけれ。しかはあれど、折にしたがひ、事にぞよるべき。」、説話末に、「これを思へば、心疾く詠めるもめでたし。」とある。「大江山」歌説話の前の比較的長文の評論は、『俊頼髄脳』が歌論書であることから、この「説話」から直接に抽出・派生した「評語」というよりは、むしろ歌学書としての評論部・本論部であると言える。従って、一見「説話」に関連しない部分ともとれようが、実は「しかはあれど、折にしたがひ、事にぞよるべき。」は「説話」を説明している部分、説話から抽出された教訓と言うことができる。というのは、それまでの「後悔の病」の説明から、急に論点を変えて、「大江山」歌説話に関連する説明をしているからである。

この、「歌は、急いで詠んではならないが、場面や事情によるべきである」という教訓は、小式部がとっさの呼びかけに応じて和歌を詠んだことをさして言っているのであるが、説話末の「これを思へば、心疾く詠めるもめでたし。」という「評語」とも結びいてなおその教訓性を高からしめている。

つまり、「大江山」歌説話は「歌の、八の病の中に、後悔の病といふやまひあり。…十日二十日などにこそ詠みけれ。」の本論部の「教訓」とは対照的な説話であり、「説話」は本論部の例証にはなっていない。しかし、「説話」直前・直後の「評語」である「しかはあれど、折にしたがひ、事にぞよるべき。」や「これを思へば、心疾く詠めるもめでたし。」によって、この説話の「教訓」が生かされているのである（注8）。

次に、『袋草紙』「置白紙作法」では、説話の前に「題目并位署許ヲ書テ諸人歌置レ之後置レ之逐電。不レ居二講席之座一云々。…凡得レ名人ハ中々ノ事云出ヨリハ遁避一ノ事也。」とある。途中略した「…」部分には、「宇多天皇の宮滝遊覧」「民部卿泰憲の和歌」の各説話とその解説があるが、『俊頼髄脳』とは異なる説話の扱いをしている。というのは、「宇多天皇の宮滝遊覧」「民部卿泰憲の和歌」「大江山」歌説話といった説話とその解説を一括して「置白紙作法」という一つの段にしているからである。とすれば、ここの「大江山」歌説話から生まれる「教訓」は、「白紙を置く」ことに主眼があり、つまり、機敏に歌を詠んだ小式部内侍の行動ではなく、やり込められた後に返歌せずすぐに逃げた定頼卿の行動から「教訓」が引き出されているのである。これは、説話の直前「評語」である「凡得レ名人ハ中々ノ事云出ヨリハ遁避一ノ事也。」からもうかがえる。「歌の名人はなまじっかなことをいうよりは、うまく逃げた方がよい」という教訓である。このように誰の行動から教訓が導かれているか、という点から見ると、『袋草紙』には独自の視点がみられる（注9）。

その他、詳しい引用は省略の上みていく。『金葉集』九雑歌番号五五〇の場合では、詞書に詠歌事情が示されているものの、ここからは教訓の示唆はみられない。『詞華集注』では、説話の前に「此内侍秀三首ハ、ミナ卒爾ニヨメリ」と「即詠」を示すことばがあるだけで、明確な教訓は示されていない。『無名草子』『夜の鶴』にも「即詠」の指摘があるだけで、同様である。御伽草子「小式部」では「さればいかにも〳〵歌の道をばたしなむべき事なり」とあるが、これは母和泉式部の和歌説話も含めての教訓である。『古今著聞集』では「話末評語」は存しない。また、その他に、『平家物語』長門本巻第七、謡曲（「浦島」「和国」「大江山」「九世戸」）、『秉燭譚』巻四、『閑田耕筆』巻一などがあるが、いずれも明確な教訓は見当たらない。

従って、「大江山」歌説話を「教訓説話」として積極的に例示しているのは、『俊頼髄脳』『袋草紙』『十訓抄』の三書のみと言える。それらの教訓を再確認すると、「急いで詠んではならないが、場面や事情に応じては急いでもよい。」（『俊頼』）、「名人は和歌について、なまじっか返歌するよりも逃げるべきだ。」（『袋草』）、「人を軽侮するなかれ。」（『十訓』）、という異なっ

た「教訓」を示しているということになる。作品個々の性格から言えば、『十訓抄』は処世訓一般を説くものであるから、このような、詠歌に限らない対人関係に関する教訓を引き出したと言えよう。『俊頼髄脳』も『袋草紙』もともに歌学書・歌論書であり、そのためこのような和歌に関する教訓が、視点こそ異なれ、示されたのである。

三、「大江山」歌説話の重点の置き方

ここで、説話の「教訓」から離れて、説話そのものに着目し、個々の作品が、どのような点に重点を置いているのか、「大江山」歌説話のどのような点を伝えたいのかを分析してみたい（注10）。その要素を順にみてゆくとおおよそ次のようになる。

① 小式部内侍の紹介、前置き
② 母和泉式部の不在
③ 歌合に小式部内侍選ばれる
④ 小式部内侍への戯れ、疑い
⑤ 定頼の来訪
⑥ 定頼の呼び掛け
⑦ 定頼の通過、退出
⑧ 小式部内侍、定頼の袖を引きとどめる
⑨ 小式部内侍、「大江山」の歌を詠む
⑩ 定頼の驚き、退散
⑪ 小式部内侍のその後、評語、補足

このうち、④では（傍線・波線および〈〉内注記は菅原）、

『俊頼』　その人の、たはぶれて
『金葉』　たはぶれて
『袋草』　戯れ云ふ
『詞華』　タハブレテ
『十訓』　定頼の中納言たはぶれて
『著聞』　定頼の中納言、たはぶれに
『小式』　有人ざんしていわく、此歌は、たんごよりきのふ人のぼりたりときこゆるよし、いづみしきぶがよみてのぼせけると申。〈「定頼」トセズ、「此歌」トハ歌合ノ歌ノコト〉
『小別』　さしも母の式部いみじき歌よみなれば、「小式部が心ばかりにては、よもよき歌をいつとても詠み侍らじ。母の式部がつらねて、小式部に譲る物ならん」と、世の人ねたく告げあひけれ共、何とことはるべき故もあらざれば、とかく過ぎ行くまゝに、「此度も又母の式部にかたらひてや詠みなまし」と、…たはぶれの給ひけるは
『雑々』　小式部哥は、母のをしへてよませける、などいひ、さたする人あり。
『威徳』　小式部が哥のよきは、母の和泉式部によませて、ぬしになる、と御所中にひろうありけり。…たはふれて
『美人』　其比いかなる人のいひなし侍るにや小しきぶハ哥よむ事かなハで母いづミ式部によませて哥合な

どにも出すといひあへり

『奇徳』　秀哥おほかりけれバ、人々そねミ侍りて、母の式部があらましよみて我子にとらせてほまれにするなめれとさたしけるゆへ

と、時代が下がるに従って、単なる「戯れ」から母による代作への「疑い」の要素が強くなっている（注11）。②の当代の有名歌人である母和泉式部の不在によって、小式部内侍は真にその実力を問われる。その言い掛かりに対する抗議が、⑧の袖を押えるという行動に表れ、⑨の「大江山」の歌を詠むに至る。

そして、これらには、それぞれ次のような「⑪小式部内侍の その後、評語、補足」がある。なお、『袋草紙』は、定頼の退散で終結し、「話末評語」は存在しない。

『俊頼』　これを思へば、心疾く詠めるもめでたし。

『詞華』　此内侍秀三首ハ、ミナ卒爾ニヨメリ

『無名』　折につけてはいとめでたかりけり、とこそ推し量らるれ。

『十訓』　小式部これより歌よみの世におぼえ出来にけり。これはうちまかせて理運のことなれども、彼卿のこゝろには、これほどの歌たゞ今よみいだすべしとは、しられざりけるにや。

『夜鶴』　また、とりあへぬことに、時もかはらずよみいづる歌の返し、たちながらいひいだす歌は、さしあたりてただ今いひたきことを、さまよくつづけ候ひぬれば、何の風情にも過ぎて候。

『小別』　それよりしてこそ、母が力を頼まねども、よき歌を詠む事よと、世の人には沙汰せられける。

『威徳』　是よりしてこそ、小式部、母がちからをからざれとも、自身とよめる也けり、と世のうたがひをはらしける。

『美人』　定頼大きに驚給ひさて〳〵かゝる当意即妙の哥よミなるに口さがなきいひなしなる物よとてこれより心を置給ひけり

『奇徳』　それより人口もやミけると也。

これらのうち、『俊頼』・『詞華』・『無名』・『十訓』・『夜鶴』・『美人』が、即詠の積極的評価と読み取れる（傍線部）。さらに、『十訓』・『小別』・『威徳』・『美人』・『奇徳』では、即詠をもととしながらも、疑いを晴らすこと、歌人としての自立を強調している（波線部）。『威徳』に「哥ゆへ身の威をあぐる事」と標題にある通りである。つまり、「母和泉式部の不在」→「戯れ・疑い」→「一連のやりとり（即詠）」→「即詠の評価」＝「疑いを晴らすこと、歌人としての自立」という流れになる。但し、「即詠の評価」と「疑いを晴らすこと、歌人としての自立」とは、表裏一体と言える。なぜなら、定頼の呼び掛けに対して、即座に歌を返すことにより、その場に母のいないこと（母の力を借りていないこと）を証明し、疑いを否定することができたからである。

従って、『十訓抄』は、評語で「たゞ今よみいだすべし」と即詠を示しながらも、母の不在の証明がかなった以上戯れは不

当であった、人にむやみに戯れたり軽んじてはならないとして、定頼の行動から「彼卿のこゝろには、…しられざりけるにや」と、徳目「侮るなかれ」の教訓に沿う記述をしているのである。

さらには、「これはうちまかせて理運のことなれども」は、小式部内侍に母和泉式部譲りの力があることを「理運」、つまり当然のものとして示しているのである。

四、小式部内侍の他の和歌説話

ところで、小式部内侍には、「大江山」歌説話の他にどのような説話があるのだろうか。そこで、次の三つの和歌説話をあげて考察してみたい（注12）。

第一は、大二条殿（教通）から病気見舞をなぜしなかったのかと責め問われた時に、「死ぬばかりなげきにこそはなげきしか生きてとふべき身にもしあらねば」と詠み、許された話である（『後拾』雑三、『袋草』巻三、『詞華』、『宇治』巻五、『奇徳』）。第二は、小式部内侍が重病になり床に臥していた時、母和泉式部の悲嘆に対して、「いかにせんいくべき方もおもほえず親にさきだつ道を知らねば」と詠んだところ、平癒したという話である（『無名』、『十訓』第十可レ庶二幾才能・芸業一事、『著聞』五、『沙石』五、『東斎』詩歌類五、『美人』注13、『月刈藻集』、『和歌奇妙談』、『本朝列女伝』三）。第三は、帝の寵愛の小松が俄かに枯れた時に、蘇生を要請され、「ことはりやかれてはいかに姫こまつ千代をば君にゆづるとおもへば」と詠んだところ、小松が生き生きと蘇り、御感に預ったという話である（『威徳』、『奇徳』、『小式』、『和歌奇妙談』注14）。いずれも、問い掛けや要請に対し、即座に詠んだものであり、小式部内侍の「即詠」の才を表わすものである。

さて、これらの三つの和歌説話と「大江山」歌説話との共通点として、「即詠」の他に、一つ目に、状況の好転ということをあげたい。いずれも「歌の徳」により状況が一変する「歌徳説話」と言えるのである。特に、第二の説話では、「天井のうへにこゑ有て」（『十訓』）、「天井ニ感ズル声アリテ…神明ノ御助ニコソ。」（『沙石』）、「天神もかんじさせ給ふにや」（『美人』）とあり、『古今集』仮名序の「目に見えぬ鬼神をもあはれとおもはせ」にかなう説話となっている（注15）。

ところで、上岡勇司氏は『古今集』以下の歌徳の要素として、A「男女の中を和らげる例」、B「人倫を化す例」、C「明神納受の例」、D「天地を動かす例」の四類を示された（注16）。そうすると、「死ぬばかり」の説話はA、「いかにせん」の説話はCとなる。「ことはりや」の説話は、帝の心情を変えた点からBと、植物・自然＝天地という関連からDとの複合型となる。「大江山」歌説話は、身の威をあげ、定頼はもとより周囲を感化したのでBとなる。かくして、四話とも歌徳説話の基本類型に合致することになる（注17）。

二つ目は、「証（あかし）」という点である。無実の証明、難題の解決、実力の証明ということである。様々な中傷があり、疑いがあり、冤罪があり、その問い掛けに際しての返答・解決をみごとに成し遂げ、時に名を揚げたということである。例え

ば、「死ぬばかり」では、「など問はざりつるぞ」（『後拾』、他書もほぼ同じ）と大二条殿からの責めがあったが、それを晴らすことができた。いわば「愛の証明」である。しかも、「御直衣の裾を引きとどめつつ」（『宇治』）、「引き留めて」（『袋草』）、「ひきとゝめよみける」（『奇徳』）のように、「大江山」歌説話と同様の抗議姿勢もみられる（注18）。「いかにせん」では、母和泉式部の直接的な問い掛けはない。しかし、死を直前にした我が子の枕もとで、「ひたゐをおさへてなきける」（『十訓』）という行為と、和歌の「おやにさきだつ」という語句によって、親に先立つ不幸という、言わば「罪」が想定される。そして、この「罪」も歌の徳により、無罪に変えられるのである。「ことはりや」では、帝からの難題を母に頼らず解決した。このときは、母の和泉式部がまず呼ばれたのだが、不在のため自ら詠むことを申し出ている。歌人としては母よりも劣る未熟者とされ、軽視されていることへの対抗心であり、偉大な母に近付くチャンスとばかりに、その難題・疑いをみごとに晴らしたのである。「大江山」では、前述の通り、母親による代作を否定した。

このように、小式部内侍の和歌説話には、「即詠」によって罪や疑いを晴らし、実力の証明をするいう側面がある。「歌徳」即ち「証」が、小式部内侍の和歌説話の特色の一つと言えるのである。そして、『十訓抄』以下の種々の作品でもそれに着目し、伝承してきたと言えないだろうか。特に、前述のように、『十訓抄』以後、小式部内侍に対しては「戯れ」から「疑い」への色が強くなっていく。例えば、御伽草子「小式部」では、「ことはりや」の話の後に「有人ざんしていわく、此歌は、たんごよりきのふ人のぼりたりときこゆるよし、いづみしきぶがよみてのぼせけると申。」として、「大江山」歌説話に続けている。『威徳』でも同様に、「ことはりや」の話の後に「此時、をの〳〵そねみねたみて、是はない〳〵此事を知て、母の式部のよみし哥也、などあらぬさまに申さたしけるを、いとはづかしく、口をしく覚ける折ふし、かの御会の人数にさゝれて、名哥よまんと思ひける所に、定頼の卿かやうに申されければ、さつそくよみて人々の疑をはらしける。誠に名誉の哥人なるべし」と「大江山」歌説話の伏線として記している。つまり、「ことはりや」の一件により小式部内侍に代作疑惑が浮上したとさえ言うのである　さらに、御伽草子「小式部」で「きのふ夜に入て、たんごより色々の物のぼせられけれども、いそぎの御めしにしたがひて、文どもを見申さずと申て」とあるのは、「まだふみも見ず」に関わる後世の創作である。昨夜届いた母からの文も「まだ」見ていないのだと態々説明しているのは、つじつま合せ、牽強付会の感が否めない（注19）。これを「ことはりや」説話とともに並置したのである。

小式部内侍の和歌説話の「歌徳」即ち「証」としての側面は、時代が下がるにつれ、強くなるのは前述の通りである。偉大な母を持つがゆえに比較され疑いをもたれる少女像、夭逝故の悲劇のヒロイン像のようなものが、次第に膨らんできたのではないだろうか（注20）。その転機が『十訓抄』の教訓的意味付けといえよう。なぜなら、『袋草紙』では定頼がみごとに逃げた

ことが肝要なのであり、小式部内侍に対する視点は存しないのである。『十訓抄』が一つの転機なのである。

おわりに

結論として、次のことをあげておく。「大江山」歌説話には、「即詠」によって「疑い」や「戯れ」などを晴らすという側面があり、それへの着目の仕方が諸書により異なるということである。加えて言えば、小式部内侍、定頼どちらの行動に着目するかによっても、説話の焦点が異なる。ここで、主なものについて、次の四類型を仮定する。

Ⅰ　小式部内侍の行動に視点を置き、秀歌・即詠に着目する。「秀歌・即詠」だから、歌（歌の作法）としては歌は（時と場合によっては）急いで詠んでよい。…『俊頼髄脳』、『無名草子』

Ⅱ　小式部内侍の行動に視点を置き、疑いを晴らすこと（持つこと）にも着目する。「秀歌・即詠」だから、疑いは晴れた。小式部内侍に対しては歌人として実力は充分ある。…御伽草子「小式部（別本）」、『和歌威徳物語』、『本朝美人鑑』、『和歌奇徳物語』

Ⅲ　定頼の行動に視点を置き、秀歌・即詠に着目する。「秀歌・即詠」だから返歌も叶わないので、歌（歌の作法）としては「秀歌・即詠」に対しては逃げるべきだ。…『袋草紙』

Ⅳ　定頼の行動に視点を置き、疑いを晴らすこと（持つこと）に着目する。「秀歌・即詠」だから返歌も叶わないので、小式部内侍には、歌人として実力は充分ある。疑いは晴れた。だから人をあなどってはならない。…『十訓抄』

Ⅰは、小式部内侍のみごとな歌いぶりを評価するもので、数多くの書がこれに触れている。Ⅱは、書名からもそうだが、「大江山」歌説話の歌徳を引き出している。それに対して『十訓抄』では明確にそのような扱いをしていない。『十訓抄』「第十可レ庶二幾才能・芸業一事」の歌徳説話群に入れていないのである（注21）。だが、Ⅳの「侮るなかれ」という観点は、Ⅱへの契機となる。Ⅱは『十訓抄』以後室町期からの創作・異説とみなされる。Ⅲの『袋草紙』では、歌学書としての性格上『十訓抄』と同様定頼の行動に着目しながら、「即詠」の秀歌には返歌に及ばないという礼儀を示している。Ⅳの『十訓抄』では、疑いや戯れに重点をおき、定頼の行動からの教訓を、「徳目」と併せて示している。「歌」という点からではなく「人」という点から、処世訓として人と接する際にはむやみに侮ってはならないとする。

そして、「評語」「徳目」などによって、積極的に教訓を明示しているのは、『俊頼髄脳』『袋草紙』『十訓抄』ということになり、その教訓はそれぞれ異なっていると結論づけられる。

小式部内侍には、他の女流歌人のように単に機転のきいた優美な和歌の応酬ということではすまされない側面がある。未熟とみなされ、著名な母和泉式部をもつために周囲から疑いを受けるというような点である。だから、Ⅳの『十訓抄』のような

語り方が生まれたのは、小式部内侍自身の宿命であったとも言えよう。この場合、即詠は単に即詠にとどまらず、『十訓抄』以後の中世・近世の語り手が示そうとしたように、その疑いを晴らし、名を揚げる「証」であり、かつまた「歌の徳」の実践にほかならないのである。

注

(1) 本稿で用いた書の本文は以下による。略号も以下の通り。古今『古今和歌集』(角川文庫)、後拾『後拾遺和歌集』(新日本古典文学大系)、俊頼『俊頼髄脳』(日本古典文学全集)、金葉『金葉和歌集』(新日本古典文学大系)、袋草『袋草紙』(『袋草紙注釈』)、詞華『詞華集注』(日本歌学大系)、無名『無名草子』(日本古典集成)、宇治『宇治拾遺物語』(新日本古典文学大系)、十訓『十訓抄』(岩波文庫)、著聞『古今著聞集』(日本古典文学大系)、沙石『沙石集』(日本古典文学大系)、『夜の鶴』(講談社学術文庫)、東斎『東斎随筆』(中世の文学)、小式「小式部」(『近古小説新纂』)、小別「小式部(別本)」(岩波文庫)、雑々『雑々集』(古典文庫)、威徳『和哥威徳物語』(古典文庫)、美人『本朝美人鑑』(古典文庫)、奇徳『和哥奇徳物語』(古典文庫)、『和歌奇妙談』(『北陸古典研究』第三・四号)。

(2) 拙稿「教訓説話伝承試論―『十訓抄』と『寝覚記』との共通説話の教訓から―」(『伝承文学研究』第四十八号・平成十年十一月)による。

(3) 西尾光一氏『中世説話文学論』(塙書房・昭和三十八年三月)による。

(4) 浅見和彦氏「小式部内侍説話考」(『成蹊国文』第二十二号・平成元年三月)では「定頼の愚行を明確に難じているのが、『十訓抄』である。」とある。また、古瀬雅義氏「小式部内侍『大江山』歌説話で語られるもの」(『国語国文論集』第二十五号・平成七年一月)では「視点を即詠の才に向けるのではなく、小式部内侍に対し侮った言動をとった定頼に向けている。」とある。

(5) 「口なしにちしほやちしほそめてけりこはえもいはぬ花のいろかな」(『俊頼髄脳』日本古典文学全集)。

(6) 「待つ宵のふけゆく鐘の声きけばかへるあしたの鳥はものかは」(『平家物語』巻第五・新編日本古典文学全集)。

(7) 「春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそをしけれ」(『千載和歌集』雑上・新日本古典文学大系)。

(8) 注(4)浅見氏論文では「すばやく歌を読むというのはすばらしい。小式部内侍の歌才と俊敏な詠み口をほめたたえたものである。」とある。注(4)古瀬氏論文では「俊頼の視点は一貫して秀歌を即詠した小式部内侍の才におかれている」とある。

(9) 注(4)浅見氏論文では「定頼の行動は失態でも何でもなく、和歌の作法に従った、むしろ見事な振舞」、注(4)古瀬氏論文では「清輔の視点は、…定頼が返歌をせず、

袖を押えた小式部内侍の手を引きのけて逃げたことに向けられている。」とある。

(10) 注（1）参照。

(11) 試みに、『百人一首』古注等を次にいくつかあげておく。「小式部が歌のよきは母の和泉式部によませて、わが歌とすると云沙汰侍りければなり」（『百人一首雑談』戸田茂睡全集）、「是は常に小式部内侍が哥のよきは母のよみてえさするなど、世中にいふことの有し故に」（『百人一首改観抄』契沖全集）、「小式部が歌は多くは母の和泉式部詠みて与ふるなりといふ人もありけり。」（『百人一首一夕話』岩波文庫）。百人一首古注では、その多くが小式部内侍への「疑い」を殊更に記しているが、紙面の都合により割愛する。

(12) これについては、橘りつ氏「『和歌威徳物語』考―小式部内侍の説話をめぐって―」（『文学論藻』第五十二号・昭和五十二年十二月）に詳しく論ぜられている。

(13) 但し、『本朝美人鑑』では歌により病状が一時的に良くなったものの、結局亡くなってしまう。

(14) この「帝」についてはいずれも記載なし。

(15) 『十訓抄』「第十可レ庶二幾才能・芸業一事」に「いかにせん」の説話を含めた歌徳説話群の評として、「力をもいれずして、あめつちをうごかし、めに見えぬ鬼神をも、あはれと思はすと、古今集序にあるは、是等の類なり。」とある。また、「いかにせん」の説話は『古今集』の古注に多く採録されているが、紙面の都合で割愛する。

(16) 上岡勇司氏「歌徳説話・再説」（『国語国文学科研究論文集』第三十八集・平成五年三月）による。

(17) 森山茂氏「歌徳説話論序説」（『尾道短期大学研究紀要』第二十三号・昭和四十九年一月）には、その類型の一つとして、「詠歌を賞賛されて、歌人としての名声を得ること」とあるが、本説話はこれに該当しよう。

(18) この記述は『後拾遺和歌集』には存在しない。

(19) なお、『百人一首臆断』（古典文庫『和泉式部研究』二）には、「古注なとに小式部か丹後より来りたる文を持てゐたる所へ、定頼行会せられ、たはむれ給ふときの事といふ説不用」とある。

(20) 『無名草子』に「命短かりけるさへ、いみじくこそおぼゆれ」とある。また、注（4）の浅見氏論文に「機知に富んだ歌を即座に思いつき、詠み出す、才気煥発な女、負けん気の女というのが、どうやら小式部内侍に定着してきたイメージであるようだ。」とある。

(21) 角川書店『日本伝奇伝説大事典』（昭和六十一年十月）の泉基博氏「歌徳説話」の項による。但し、氏は注（15）の「いかにせん」歌説話を歌徳説話としていない。

付記　本稿は北海道説話文学研究会平成十年度夏季大会（平成十年八月八日・於札幌大学）での研究発表「小式部内侍『大江山』説話における教訓」をまとめたものである。